

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.08)

「生命のあるところ希望あり」

・・・天国と地獄・・・

「嘘をつくと、地獄の閻魔様に舌を抜かれる」と言う言葉を、大人から何時も聞かされていた記憶がある。子供心にも地獄とは恐ろしい所だという気持と、逆にどんな場所か興味を持っていて、例え、そのような場所があるとすれば、そんな恐ろしい所で無く、少しでも楽園へ行くチャンスは、増やしておきたいと、子供のころから持ち続けたと同じように、常日頃、「嘘はつかず、まじめに暮らす」ことを生活信条にしてきた。

そんな折、たまたま相当古い雑誌の中に、サブタイトルの内容のコラムを見つけたので、世の中には、いろいろなことを研究している人がいるものだと、感心しながら、メモしていたのを紹介したい。

スペインの某大学の科学者ホルヘ・ペレス氏らが、聖書の記述から、地獄と天国の温度を調べたそうである。「ヨハネの黙示録」に地獄の様相として、「火と硫黄の池に投げ込まれた」とあり、ここから地獄の温度は、「硫黄の発火点以下と思われる」ため、摂氏445度前後になる。

また天国の温度は、イザヤ書に、「月の光は日の光のようになる。日の光は7倍になり、7つの日の光のようになる」とある記述から、熱放射に関する、「ステファン・ボルツマンの法則」を利用して計算し、232度と算出した。

ここから地獄の場所は、大洋の底の熱水の出口あたりで、天国は「熱圏」と呼ばれる、大気圏の上層あたりだとのことで、いずれにしても高温の世界であるというような、内容であった。

地獄でも別の意味の地獄について、次のような記述も紹介しよう。「なぜ、不思議の国ニッポン」(ポール・ボネ著、ダイヤモンド社)のなかで、「地獄を表現しようという試みにはいろいろあるが・・・」と、名著「The English (英国人)の著者は皮肉たっぷりに書いてある。

「英国人にとって見れば、ドイツ人が警察官をし、スウェーデン人が喜劇役者を演じ、イタリア人が衛兵をつとめ、フランス人が道路を掘り、ベルギー人がポップ歌手となり、スペイン人が鉄道を運営し・・・と地獄を構成する人々について、まだ延々と続くのだが、幸か不幸か“にほんじん”は入っていない。」とある。

解答はお互いに考えましょう。百人百通りの考えがあると思うが、こちらの方は極めて俗世間的である。さらにメキシコ人を上の例えに当てはまると、「ウン～、うん～」いくつか当てはまる・・・閑話休題・・・

情緒的な説明言葉としての、「天国に上った気分だ」とか、「地獄の経験をした」などの言葉を、時には使うこともあると思うが、実際は生きている限りは、誰も天国も地獄もまだ経験したことがない(当たり前だ!)のに、何となく使っている。

メキシコは世界でも有数の、犯罪都市だなどと言う人もいるが、現時点では、ボラッチョ・ボニート氏に関しては、時おり物乞いに付き纏われる程度で、地獄の経験をしていないし、楽園に上った気分も経験していない。いや、職場では周囲に女性が多いことが、今まで経験したことの無い楽園かも知れない。



次のような諺がある。「**Donde hay vida, hay esperanza**」(ドンデ アイ ビダ アイ エスペランサ と発音し、直訳は表題の通りであるが、日本語の諺としては、原文の意を汲むと、命あつてのものだねというところか)。今回はこれをタイトルにした。

特に今は何も無いとはいえ、これが当たり前の中として、タイトルに記したように、「生命あるところに希望あり」を心に抱きながら、ボランティア活動に励んでいるし、残り少ない人生を過ごしたいものである。

この度の報告は、メキシコの話から大きくカーブしてしまった。早くも話のネタ(タネ? どちらの言葉が正しいのだろう)が途切れたので、変化球でちょっとかわしたな、などと思わないでください。

また時代的话题を、「鵜の目鷹の目で、血眼になって?」探します。(これらの言葉も、よく考えれば、天国に上った気分だなどと同様に、不思議な言葉である)

;**Hasta la vista!** (アスタ ラ ビスタ)(また、お会いしましょう) (2009年4月1日、エイプリルフールにちなんで、変わった話題を考えた)



富士山が爆発?とでも思うように姿が似ている、メキシコのポポカテペトル火山(5492m)を望む・・・ 火山活動のマグマは何度ぐらいだろうか。